



Title	書籍出版の観点からみた人文社会科学研究の推進
Author(s)	森岡, 和子; 中野, 悦子; 栗谷, 尚子
Description	RA協議会第2回年次大会 : URAシステムの高度化による科学技術イノベーションへの貢献. 2016年9月1日(木)-9月2日(金). 主催: リサーチ・アドミニストレーター協議会. 福井駅前 AOSSA (福井県県民ホール、福井市地域交流プラザ). 福井
Issue Date	2016-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96173
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/
Type	conference poster
File Information	2016RA_P64.pdf



人文社会系の研究成果の発表は、論文投稿とともに、書籍出版が大きなウェイトを占める。組織の研究力を推進していく上で、包括的な出版力の強化が求められている。組織の出版力を強化するとは、所属研究者による**出版書籍数を増やす仕組みをつくる**こと、学術的および社会的**評価が高い書籍を継続的に出版する（よい本をつくる）ための出版支援**を行うことである。書籍出版には、出版の企画立案から、出版社との交渉、編集、校正、出版後のアウトリーチまで、いくつもの段階があり、それぞれのステージで**URAによる出版支援**が可能であるという観点から、本発表では、北海道大学文学研究科が取り組んでいる書籍出版力強化に関する実践報告を行う。また、出版された書籍の評価について、多視点から考察し、日本の人文社会科学系出版の評価について検討する。

概要

書籍出版の流れに沿った強化ポイント

出版前

- 出版助成の情報提供、獲得支援
- 組織独自の出版助成制度の整備
- 組織独自の出版企画立案
- 出版社選定、出版条件の相談受付

執筆中

- 図版等の使用許諾手続き
- 編集者との連絡調整
- 編集・校正
- タイトル・装丁

出版後

- アウトリーチ空間の創成
- アウトリーチイベントの企画
- 関連業界との連携
- 評価に関する取り組み

出版前

出版力強化には出版助成が必須！

学術書の出版数を増やすためには、出版助成の獲得が大きなウェイトを占める。組織の出版力を強化するためには、**組織独自の出版助成制度を設ける**ことが、効果的である。出版助成には、科研費の「研究成果公開促進費」の他、公益財団などの出版助成もある。**URAは情報を的確にキャッチし研究者に情報提供**することが求められる。

■ **組織独自の助成（文学研究科）**

文学研究科では、4種類の出版助成を行っている。

1) **一般図書**：単著・編著・翻訳（50万円／冊、80万円の年も、年間10冊程度）
出版社選べる。共著者が学外者でもOK

2) **ライブラリ**：一般向け（100万円／冊、年間2冊程度、企画物＋単著）
企画物＝毎年文学研究科で開催している公開講座のテーマを書籍化

3) **研究叢書**：学術図書（150万円／冊、年間1冊）

4) **PD向け**：学術図書（150万円／冊、年間1冊）→**アカボス就職に一定の効果あり**

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	合計
一般図書		6	8	9	9	5	12	5	54
ライブラリ	3	2		2		3	2	1	13
研究叢書	2				1	1			4
PD向け	4		1	1	5		1		12
合計	9	8	9	12	15	9	15	6	83

今後の課題：外書出版のため**校間費支援**を検討予定

■ **組織独自の助成（北海道大学）**

北海道大学「学術成果刊行助成」H21年度～
大学教員の学術研究成果としての著作物、北大博士課程修了者の学位論文に基づく著作物
最大500万円助成（H29年度は200万円）、年度に1～2件採択
文学研究科からは、これまでに5件採択（全12件中）

■ **科研費・研究成果公開促進費の「学術図書」**

過去に獲得した教員にヒアリング。若手研究者向け出版セミナーの企画、情報提供依頼。
今後獲得を目指す教員に対して、組織独自助成、民間助成との違いを情報提供。

■ **公益財団などの出版助成**

人文社会系の出版助成を文学研究科の教職員専用ポータルサイトにまとめて紹介。
助成の対象分野が近い研究者に適宜、声をかけていく。
募集時期・要項のほか、過年度の採択情報や傾向について情報提供。

出版前

出版企画立案・出版条件の調整

研究成果を書籍化し、良い本を作るためには、
1) 優れた出版企画 2) 適切な出版社選び 3) 企画にあった出版条件が求められる。**出版事情に精通した人材=URAが寄与**できる部分である

■ **組織独自の出版企画**

公開講座および部局主催の国際シンポジウムの内容を部局で企画書籍化してきた。公開講座の担当講師が、その年の講座のテーマをもとに原稿を執筆し、8～9名分の原稿を集めて**文学研究科ライブラリ**として企画出版。文学研究科の多彩な研究領域について、一般向けにわかりやすく伝えることを目指している。これまでに文学研究科独自で企画した文学研究科ライブラリは10巻刊行されている。書籍出版およびエディター経験のあるURAが、この企画全般に関わる。

■ **出版社選び**

出版社選びで考慮すること

- ・その出版社が得意とする分野を把握しておく
- ・一所属する研究コミュニティから評価の高い出版社とつながりをもつ
- ・よい編集者と校正者がいること
- ・カリスマ編集者は、知人を介して紹介してもらう
- ・出版社の人を見たらとにかく名刺を渡せ、本話をせよ
- ・提示する出版条件の妥当性
- ・大学出版会の役割
 - 研究者の業績づくりに重点（若手研究者の学位論文の書籍化など）

■ **出版条件の精査**

- ・初版部数
- ・助成金金額
- ・買い取り部数
- ・初版印税
- ・自己負担額
- ・刊行までのスケジュール
 - 企画会議までの期間
 - 校正期間（新書は短いので注意）
 - 刊行時期

出版条件は、出版社の都合と執筆者の都合のすり合わせが大切。
複数の出版社の条件を検討して、より適切な出版企画に合った条件を選ぶ目も大切。

執筆中

執筆・編集のあれこれ

原稿執筆は研究者が最も頑張る部分であるが、組織独自の出版企画の場合は、**URAが研究者と編集担当者の仲介者**として関わり、より円滑で良質な出版に寄与できる。

■ **適切な図版選定**

本文の内容に合ったイラストであるか、本当にその図版が必要か、カラーにするかどうか、モノクロ化する場合失われる情報をどう補うか、よりわかりやすい図版はないか、図版の解像度に問題はないか、オリジナル図版を作成するかどうかなど、著者の希望と予算など出版に関するさまざまな制約の中から、**使用図版の最適解**を相談しながら見つけていく。

■ **図版の使用許諾手続き**

本文中で用いる写真やイラスト、グラフや地図などの図版に関しては、**著者のオリジナル以外**は、**許諾手続きが必要**。出版社が手続きした方がよい場合と、著者個人で使用許諾をとった方がよい場合がある。その判断や、編集者との調整は、URAが行うとスムーズ。また、使用料が発生する場合や海外組織、特殊団体との許諾手続き、著作権者不明の図版の調査については、URAが担当することが適している。

■ **編集会議**

出版社の企画会議を受け、編集者と著者（編者）とともに編集会議に出席。
章立てや構成、統一漢字仮名遣いの設定、タイトル・装丁決定などに関わる。

■ **編集・校正**

研究者は忙しい。特に執筆数が多い場合は、足並みを揃えた編集・校正作業が求められる。このためには、執筆者に対する**適切なペースメイク**が肝心。学事暦、出張予定など、研究者のスケジュールを把握して、良いタイミングで原稿提出のリマインドをかけてペースメイクをしていく。**執筆者と編集者との間をつなぐ**、これぞURAの真骨頂。
一般向け書籍の場合、ことばや説明が専門的過ぎないか、図版の数や内容・配置が適切か、注釈の入れ方は適切か、わかりづらい部分はどのように修正すればよいか、ターゲット読者向けの書き分けについて編集者とともに意見を出していく。

■ **タイトル・装丁**

特に一般向け図書の場合は、「売れる本」であることが大事。当初の企画から編集会議で、より**キャッチーなタイトル**に変更することもある。文学研究科ライブラリシリーズは編集者と著者（編者）ともに、**タイトルやサブタイトル**を考えている。
あわせて、表紙の装丁も大切。プロデザイナーがいけない場合は、画像検索サイトから、本のイメージに合う写真を見つけてきて、編集者、著者（編者）、URAで選定することもある。

■ **仲介者・オアシスとして**

時として起る研究者と編集者の行き違い。お互いの思いと主張にフククション置いて双方の調整をはかり、わだかまりを解消していくことは仲介者の大切な役割である。研究者は、時には執筆に行き詰まることや、執筆内容に迷いが生じることもある。そんな時、話を聞いたり雑談をすることで頭の中が整理できることもあるとのこと。

アウトリーチ

アウトリーチ空間の創成・書香の森

書籍出版後、それを広く社会に周知還元することが求められている。本研究科では、アウトリーチの場として「書香の森」という空間を設け、**実空間とインターネット上の空間を連動**させて、書籍による研究成果の発信を行っている。

■ **書香の森**



文学研究科・文学部のエントランスホールに設置。文学研究科教員が執筆した図書展示のほか、図書関連の企画展示や美術作品の展示を行う。図書展示のほか、読書会や絵画解説会などのイベントスペースとしても活用し、文学研究科の広く多彩な研究を紹介する**学術交流と知の発信の場**となっている。

所蔵書数	約550冊
著書展示者数	142名
読書会	6回（2014.10～）
特集図書展示	6回（2013.10～）
研究紹介企画展示	17回（2009.9～）
絵画展示『美術の北大』	11回（2013.9～）
絵画作品解説会	1回（2014.7）
その他イベント	1回（2013.9）

■ **ウェブ版「書香の森」**



書香の森に展示されている図書と、文学研究科発行の雑誌、企画展示やアウトリーチイベントについてウェブサイトにて紹介する場。

【書籍の紹介項目】
タイトル・サブタイトル・著者名・ISBN・発行日・体裁・定価・出版社・本文言語・主要目次・書影・内容紹介・著者からのコメント・関連イベント・受賞情報・メディアの反応など関連情報<リンク> 附属図書館・紀伊國屋書店・出版社・著者の研究者ページ・同じ著者の他の図書・書評・インターネット上の関連情報など

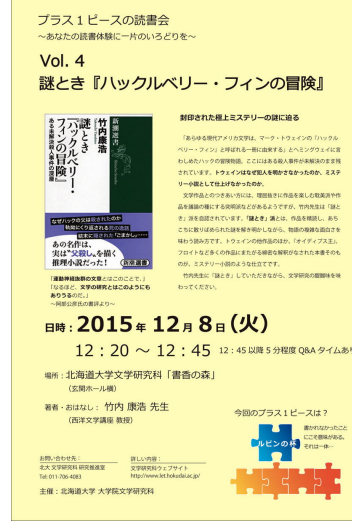
執筆時のエピソードや研究上の位置づけなどを著者自身のことばで発信、出版後の反響を長期的に追跡し更新。

アウトリーチ

アウトリーチイベント・広報活動

社会に向けてのアウトリーチ活動として、読書会、ブックトークなどのイベント活動、書店や出版社、メディアと連携した広報活動が挙げられる。一般向け書籍においては、**重要な活動**であるとともに、研究者と研究が周知されることにより、**新たな学術出版企画の呼び水**となることがある。

■ **プラス1ピースの読書会**



URAの企画により、文学研究科書香の森にて開催される読書会。文学研究科教員が自著を1冊選び、研究上の位置づけ、執筆に関するエピソード、出版後の反響などを語る。毎回「プラス1ピース」のキーワードを設け、書評やインターネット上では読めないちょっと美味しいお話が聞けるお昼休みのイベント。

■ **高校への出張読書会**



文学研究科教員とURAが札幌市内の高校に出向き、文学研究科ライブラリを題材として開催する読書イベント。書籍の紹介とともに文学研究科の多彩な研究紹介や双方の課題解決に向けた双方向型のアクティブラーニングの実践の場でもある。終了後、進路相談会を開催し、高校生の進路選択支援も行う。

■ **ブックトーク・イベント開催支援**

書店や出版社の協力の下、教員個人が新刊書のブックトーク・イベントを開催する場合がある。URAは、イベント企画・運営に関する助言や、広報支援、イベント支援員の確保に協力する。

■ **人文学カフェ～書店との連携**



文学研究科教員の研究紹介を行う「北大文学カフェ」。トークイベントは、札幌駅前の紀伊國屋書店札幌本店のイベントスペースにて行われ、会場で話題提供者の著書が販売される。書店と連携することで、イベントの内容に興味を持ち、より深く知りたいと思った人に、著書を通じて、研究内容をより深く詳細に届けることが可能となる。

■ **書評依頼～出版社・メディアとの連携**

新聞や雑誌の書評欄で取り上げられると、その後の販売部数や反響に大きな影響をもたらす。出版社がメディアに依頼することが主流であるが、出版社の守備範囲外のツゲがある場合は、出版社に紹介したりして、アウトリーチの幅を広げていく。

評価

研究者は評価指標をどう考える？

出版された書籍を研究力として評価する指標はあるのか？さまざまな「ものさし」について、多くの著書をもつ研究者の意見を調査した。研究分野によって違いはあるが、**多角的な指標が必要**であることは、ほぼ意見の一致をみた。

指 標	positive	negative
著作数	・出版すること自体に意味がある ・研究成果の生産性を示す	・著作数のみで自己満足してはならない
受賞	・一定の審査基準を通過している ・メジャー学会で賞が増加してきた	・短期的な話題になる本が多い ・しがらみがあって政治的要素あり
書評	・読まれて反響があることの意義 ・ 書評者と内容 により判断する ・数とともに 学会誌の権威 も重要 ・良質な書評の雑誌が廃刊され残念	・玉石混淆、客観的指標にならない ・必ずしもよい評価ばかりでない ・学会誌編集委員の意向が反映 ・先鋭的な本には書評がつきにくい
引用	・読まれることで本に意味が出る ・学術書の引用数は意味がある ・SNSの反響は今後無視できない	・相互引用という悪しき慣習 ・引用の質は引用数より大事、人社会の場合、否定的な引用が多い ・引用数を把握するのは至難の業
販売部数	・一般書の場合、販売部数は大事	・学術書は販売部数で評価できない
出版社	・最もシビアなのは 編集者の目 ・専門分野で評価されている出版社からの出版は評価される	
図書館所蔵数	・図書館の 選書フィルター を通る ・所蔵館により読者を把握できる	
増補版再版	・ 中長期的な影響力 を測定する指標 ・長く読み継がれる本として評価	
入試問題	・内容が信頼でき、文体が普遍的であると評価され入試問題になる	
翻訳	・翻訳依頼は海外で評価された証拠 ・無断翻訳には憤慨するが有意義評価されたということか	
玄人ならわかる？	・学術書の価値はその 専門分野の研究者の共通理解 に任されている	

学術の評価≠社会的評価
学術書の場合は、研究者コミュニティ内の学術的評価が重視される。一般書の評価は、本の売れ行きや話題性など社会的評価が重要であり、読者が読みたい内容を書く技術が必要である。社会的評価を高めるためにURAによる出版支援が効果的である。

評価

反響を調査する方法と課題

英語で書かれた書籍や論文であれば、**Google Scholar** や **ProQuest** をプラットフォームとするデータベース（例えば **Sociological Abstracts** や **ERIC** ）を用いれば、被引用文献が把握できる。また、論文であれば **Altmetrics** を用いれば、ソーシャルメディアの反応もあわせて定量評価が可能である。人文社会系の場合、論文とともに書籍出版が研究成果の重要な位置を占めることが国際的に認識されていて、今後、書籍のオープンアクセス化が進展すれば、Altmetrics を中心とした定量評価が加速していく可能性はある。

しかし、ことばの問題と書籍のオープンアクセスの壁は大きい

日本語で書かれた書籍の反響は、上記ツールでは把握できない。学術書籍出版のオープンアクセスも、まだ数が少なく今後の動向が予測できない。では、現状でできることは？

■ **反響を調べる方法**

- ・研究者からの情報提供：学会誌の書評や雑誌引用などネットでは拾えない情報
- ・検索エンジンでのサーチ：玉石混淆の関連情報
- ・Facebook や Twitter など SNS でのサーチ：専門家集団より広域な反響
- ・CiNii Books：大学図書館所蔵数
- ・国立国会図書館サーチ：都道府県立図書館、政令指定都市立中央図書館所蔵数
- ・新聞データベース：書評、受賞、その他関連情報
- ・Google Scholar：日本語書籍は精度に欠けるが、ある程度の引用は拾える
- ・出版社からの情報提供：販売部数や出版社に届く反響

今のところこれらの情報を丁寧に集めて集積していくしかない
情報集積スペースとしてのウェブ版「書香の森」

■ **課題とその解決に向けて**

日本語書籍の反響を定量評価する適切なツールが存在しない
現状では手間のかかる手作業となり、評価の広域化・共有化につながらない
→ Altmetrics 的なツールの進化？（言語対応、書籍対応）
→ 学術書籍のオープンアクセス化？
→ 書籍評価の共通プラットフォームの創成？

まとめ

書籍出版と人社系研究推進

人文社会系研究組織の出版力を強化するために以下の取り組みができる。

■ **組織全体の出版件数を増やす**

- ・組織独自の出版助成を充実させる
- ・科研費および民間の出版助成への申請をはたらきかける
- ・組織独自の出版企画の立案、継続する

■ **出版の周辺作業を支援する**

- ・出版企画や契約条件について出版社との事務的なやりとりをサポート
- ・図版等の使用許諾手続きをサポートする
- ・編集担当者や執筆者とのかけ橋になる
- ・編集、校正、デザイン等、本づくり全般にゆるやかに関わる

■ **アウトリーチを研究評価につなげる**

- ・アウトリーチ活動を組織的に実施する
- ・アウトリーチの場を創造し、積極的に活用する
- ・出版社やメディアと連携して広報活動を行う
- ・ウェブサイトやSNSを活用し、研究コミュニティと社会一般の双方からの評価を得られるしかけをつくる
- ・中長期に渡る評価に対応できるように、アーカイブ的な機能をもつアウトリーチの仕組みをつくる
- ・書籍情報から、研究者の研究活動全般を把握できる仕組みをつくる
→ ウェブ版「書香の森」

■ **書籍出版への関心を高める**

現在は、適切な書籍評価のツールが存在しないが、そもそも評価ツールが必要かどうかも含め、書籍出版について組織全体でオープンに議論する気運を高め、関心を継続していく